

菌治療を行い、定期的に内視鏡にて経過観察を行った。

【成績】 H. pylori 感染は陰性が55例、陽性が46例であった。早期胃癌4例（U：2例、M：1例、L：1例）を認めた。胃癌の発見率は3.96%と高率であった。全例ピロリ感染陽性であり、萎縮も高度であった。さらに41例に対してH. pylori 除菌を施行した。また除菌後3例の早期胃癌（U：1例、M：1例、L：1例）を認めた。発見率は7.3%と高率に認められた。除菌後胃癌発見までの期間は平均84ヶ月と通常の除菌後胃癌の発症に比べ長かった。

【結語】 胃癌発生に抑制的と報告されているNSAIDsのひとつであるアスピリン内服患者においても高率に胃癌を認めたことから、ピロリ菌除菌後も含めて嚴重な内視鏡検査の必要性は高いと思われる。

P3-46.

遠隔転移を有する大腸癌の原発巣切除による治療効果の検討

(社会人大学院博士課程4年人体構造学、日本赤十字社医療センター 大腸肛門外科)

○天野 隆皓

(人体構造学)

河田 晋一、林 省吾、伊藤 正裕

(日本赤十字社医療センター 大腸肛門外科)

須並 英二

【目的】 大腸癌治療ガイドラインでは、遠隔転移が切除不能な場合、原発巣による症状がない場合の原発巣切除の有用性は確立されていないが、当院における遠隔転移を有する大腸癌の治療成績を解析し、根治度C（Cur C）となる場合の原発巣切除の意義を検討する。

【対象】 2008年から2015年に当院で初回治療を施行した結腸、直腸癌のうちStage IVが画像的または手術的に証明された187例。

【方法】 治療戦略別に1：肉眼的に原発巣切除及び転移巣切除を達成した群（Cur B群：43例）、2：有症状等で原発巣のみ切除後治療施行群（Cur C群：114例）、3：原発巣・遠隔転移ともに非切除で化学療法施行群（Chemo群：15例）、4：Best Supportive Care 施行群（BSC群：15例）、の4群で解析した。

さらにCur C群で予後に影響を与える因子の検討を行った。2群間の統計学的有意差の検定は、単変量解析では χ^2 検定、Fisher's exact test、non-paired t testを、多変量解析ではロジスティック回帰分析を用いた。生存率に関してはKaplan-Meier methodを用いて検討し、2群間の差については、log-rank test、Coxの比例ハザードモデルを用いて検定を行った。 $P < 0.05$ を統計学的に有意であると判断した。

【結果】 遠隔転移の詳細は、肝：152例、肺：36例、腹膜播種：44例、遠隔リンパ節：40例、その他：9例で（重複を含む）、M因子数別では1臓器：116例、2臓器：53例、3臓器以上：18例であった。各群の5年生存率（5y-OS）は、Cur B群：48%、Cur C群：16%、Chemo群およびBSC群は0%であった。Cur C群において、組織型が分化型は86例、5y-OSは23%で、低分化型は28例で0%であった。M因子数別では、1臓器：61例、5y-OSは23%、2臓器：40例、11%、3臓器以上：13例、0%であった。

【考察】 Cur Cでも原発巣切除を行った症例の5年生存率は16%であり、原発巣非切除で化学療法を施行した群よりも有意に高かった。特に組織型が分化型、M因子数が1臓器では予後良好であった。

P3-47.

乳腺悪性腫瘍患者血小板中 mRNA の診断的価値についての検討

(乳腺科)

○上田 亜衣、石川 孝

(分子病理学)

金蔵 孝介、黒田 雅彦

【目的】 乳癌治療の要は、生物学的特性により分類されるサブタイプに応じた個別化治療である。本研究では乳癌患者と健常群の血小板中 mRNA の網羅的解析を行い、mRNA 発現プロファイルによる癌の診断およびサブタイプ分類が可能かを検討する。簡便に採取できる血液検体から乳癌の確定診断およびサブタイプ決定ができれば、乳癌の早期発見、適切な治療方針の決定や適切な薬剤の選択を可能とし、乳癌患者の生命予後の延長に寄与できると考える。

【対象と方法】 stage I~IIA のホルモン受容体陽性、HER 2 受容体陰性原発性乳癌患者18人と健常ボラ